

2022年4月17日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「さあ、共に生きよう」

聖書：ヨハネによる福音書21：1～14

ペトロたちは、故郷のガリラヤに帰り元の漁師生活を始めた。今までずっと一緒におられたイエス様がない。それはとても寂しく、不安であったかと思う。久しぶりに漁に出たが全く魚が取れない。その時にイエスが岸に立っておられ、ペトロたちに声をかけた。だがその方がイエスだとは気づかずにいた。それでも、その人が言う「舟の右側に網を打ちなさい。」との言葉を信じ、網を打つと大漁となる。そこで「主だ」と気づく。するとペトロは、慌てて湖に飛び込んだ。裸同然だったので「恐れ多い」と思ったからであろう。この場面は他の福音書に似たような記事がある。ただ、その場面はイエスに最初に出会ったころの話。このヨハネ福音書に限っては、復活後になっている。何故か？

ここは、マルコ福音書にある「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ」(16:7)という言葉を取り上げる。復活したイエスはガリラヤに行かれるというのである。そのガリラヤとは、ペトロたちの故郷。ガリラヤで生まれ育ち、ガリラヤ湖(ティベリアス湖)で漁師として働き、生活していた場所。「そこでお目にかかれる」と言う。この物語は、復活したイエスは、あなたが今いるところに主は居られる。あなたの生活している様々な場所、「そこでお目にかかれる」のだと言うメッセージがある。“復活”の物語には、私たちのこの目でキリストを見ることはできない。しかし、かつてガリラヤで出会った時のようにあなたと共にいるというメッセージがある。私たちが、今いるところで、愛を感じ、慰め、励ましを受け、希望を覚える時、そこには確かにキリストが居られるのである。

もう一つ。ペトロたちはこの時、意気消沈していた。その時、イエスは自ら出会い、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(21:12)と声をかける。イエスはこれまでもよく人々と食事をされていた。嫌われ者の家、友無き者の家に上がって人々と食事をした。

私たちの教会も、そのような食事の交わりを大事にしながら、よく一品料理をそれぞれが持ち寄って、お食事会をしました。今は、そういうことが出来づらい状況にある。しかし、かつて私たちが共に交わり、共に食事をしたその只中にキリストが共に居られたことを覚えたい。あの時も、この時もキリストが共に居られて「さあ、来て、…食事をしなさい」と招かれて、私たちは楽しいひと時があったことを覚えよう。その時の神は、今も私たちと共にある。イエスが「さあ、来て、…食事をしなさい」とは、「さあ、共に生きよう」ということでもある。私たちは共に生きる時、イエスも共にあることを覚え、生きる力としよう。(神谷)